

平成 19 年 3 月 25 日

「モンゴル国子どもの発達を支援する指導法改善プロジェクト」業務報告書

～試行授業、協議会等を通じた試行版指導書改善およびモニタリングフォーム改善に関する指導助言～

篠原文陽児（担当科目：IT 教育）

1. 出張期間 平成 19 年 2 月 18 日（日）～同年 3 月 13 日（火）
2. 目的 JICA 人間開発部による(株) コーエイ総合研究所と本学の 3 ケ年プロジェクト「モンゴル国初等中等教育指導法改善プロジェクト」事業を効果的かつ効率的に実施及び運営するため、モンゴル国カウンターパートとともに試行実験授業、プロジェクト全体会と IT 領域部会及び JCC 会議等を通じて、試行版指導書改善およびモニタリングフォームの改善に関する指導助言にあたるとともに、関係機関および関係者等との協議を行う。
3. 現地業務の活動内容及び進捗
 - (1) 試行実験授業の観察と指導及び助言等
 - ①試行実験授業観察等
2 月 21 日（水）、23 日（金）、28 日（水）、3 月 2 日（金）、7 日（水）の 5 日間の中で、Setgemji 校、第 97 学校、第 45 学校で、それぞれ 3 回、4 回、3 回、計 10 回が実施された。また、これら試行実験授業での指導及び助言に加え、2 月 26 日（月）、27 日（火）、3 月 1 日（木）、5 日（月）、7 日（水）、9 日（金）それぞれ夕刻には、IT センターにて、事前の授業内容及び方法検討会が実施され、指導と助言に当たった。これらに基づいて、試行授業が行われた。学校の特色及び地理的環境、児童あるいは生徒の身体的及び心身の発達、学年、コンピュータの設置の有無など、明確な実験要因と持って、予定に従って、進捗していると考えている。
 - ②実験校における講演等
2 月 28 日（水）と 3 月 7 日（水）両日の午前中には Setgemji 校、午後には第 45 学校で、3 月 2 日（金）と 9 日（金）両日の午前中には第 97 学校で、それぞれ試行授業の開始前 50 分間及び試行授業に関する協議終了後 1 時間に、それぞれの学校に所属する教員対象に、「教育の 4 本柱とモ国教育スタンダードの意味」（I 及び II）、「楽しい学習の条件と教授方略及び学習方略」（I 及び II）、「授業の評価と学習の評価及び評定の方法」（I 及び II）と題する講義を、それぞれ実施した。いずれも、プロジェクトの進展にかかる科学的な知見を得る目的で、企画し実施された。
 - ③全体会等
2 月 24 日（土）の全体会、3 月 12 日（月）午前の JCC 会議等において、IT の他教科・領域等での活用、本プロジェクト内で相互に授業等を見学などする機会の意義、試行実験授業における実験要因あるいは実験仮説の明確化と事業の科学化の重要性などについて、発言

した。

(2) モニタリングフォームの改善への提案

今般上記試行授業で使用された様式は、全21項目あった。これを、
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~shinohar/projects/mongol/monmon/mnfrmv1.pdf> (2007年1月提案) に示してあるように、全35項目として改善する提案を行っている。なお、大項目としては、A指導、B意欲、C環境であり、それぞれが、A1 目標、A2 内容、A3 運営、A4 評価、B1 児童(生徒)理解、B2 指導、B3 授業改善、C1 教室、C2 教室内等掲示に分類されている。モ国本プロジェクト関係者の間で、いっそうの理解を得るため、さらに協議が重ねられている。

なお、別項に示すように、ここでいう「モニタリングフォーム」とは、プロジェクト推進に当たって必要とされる限られた単元あるいは内容から構成された「指導書改善のための資料を得るため」及び年に1回か2回など数回のみ「意図的に企画や実施等される授業及び指導方法を改善しようとする目的」で利用される、いわば、「特別仕立ての『授業観察シート』」と筆者は理解している。つまり、本プロジェクトの進行全体をモニターする「モニタリングフォーム」でもない。したがって、この「モニタリングフォーム」を日常の授業実践で参考とするには詳細すぎる内容項目である。むしろ日常の授業実践では、目的に応じ、ここに示されている項目から必要と考えられる項目を選択して利用されるべきである。

(3) 関係諸機関および関係者との協議等

①3月6日(火)午後、ウランバートル市教育局における講演「日本の教育改革とIT教育の現状及び本プロジェクトへの示唆」の実施

参加者は、ウランバートル市教育局 IT 関係職員及び同市公立学校に所属する IT 教員計 28 名。短期的及び長期的な施策が求められることを日本の事例をもとに提言し、参加者と協議が行われた。つまり、モ国及びウランバートル市におけるソフトウェアを含む IT 関連機器の導入の実態および計画を踏まえて、短期的には、「誤り概念のデータベース」構築を、関係教員がチームを組んで企画及び実行すること、長期的には、「持続可能な開発のための教育」(ESD、Education for Sustainable Development) 理念とモ国及びウ市それぞれの「国及び地域の特色を重視した教育」(IKE、Indigenous Knowledge-base Education) 理念の両者を十分に考慮した教育施策の中こそ IT 教育を成功させる「鍵」があることを指摘した。加えて、[Politically Correct]の概念のもと、テレビ、雑誌などマスメディア等を巻き込んだ広報活動が、なおいっそう求められ重要であることを指摘した。

②教員養成大学の授業改善に関する講義等の実施

本プロジェクトに直接関わる教育実践の場における「指導方法改善」の実施は重要であるが、同時に、教師を育てる教員養成大学の教員が先ず指導法改善の模範を示されなければならないこと、学部等段階の学生が進行しつつある教育改革と指導法改善にいっそうの意欲を示すことを期待して、それぞれ資料に基づき実施された。(ア)3月6日(火)午前、大学教員による授業「データベースの基礎と開発」(受講者 38 名)の観察と評価に関する指導及び助言、(イ)3月6日(火)午後、学部4年生32名対象の講義「近未来の教育-学習の4本柱と望まれる教師及び子ども-」と、(ウ)3月9日(金)午後、大学教員12名を

対象にした討議「教員研修の技術と課題-Free software の活用-」である。

③その他、教員養成大学科学技術学部の IT 関係授業科目及びシラバスについて、東京学芸大学の開設授業科目を事例に、教育及び研究の両者に関して、いっそうの情報交換と相互理解を深める礎を形成する意見交換を行った。

4. 成果と課題

(1) 成果

渡航前に準備した「一時停止」の標識を、予定された 10 回の試行授業において観察教員及び、各クラスで優秀な児童あるいは生徒とやや理解が遅いと思われる児童あるいは生徒に持たせ、授業の進行が早いと思われたら高く上げるように指示していたが、これを上げる教員及び児童あるいは生徒は皆無であった。このことは、本プロジェクトがねらう「教師が太る授業」「内緒話のグループ学習」に向けた、プロジェクトの進捗と改善を示唆する事実である。筆者はさらに「耳と手による強制された学習」から「口と手による唱和と共感の学習」を標語に加え、ワーキンググループ担当教員等のいっそうの努力と展開への意欲を喚起し支援した。また、「モニタリングフォーム」の改善についても、その意味と意義がともに理解され、いっそうの改善が図られつつある。

(2) 課題

①2006年6月の本プロジェクト開始以来、モ国現地教育関係等調査及び授業観察と協議、カウンターパートによる日本国内研修と協議等を通じ開発に取り掛かり、2007年1月末に校了し、今般同年2月初めから3月半ばにかけて本プロジェクトの実施のために完成した「IT教育：試行版指導書」は、「初等中等教育『初等教育』スタンダード」(MNS5420-2:2004)、「初等中等教育『基礎教育』スタンダード」(MNS5420-3:2004)、「初等中等教育『IT教育』スタンダード」(MNS5420-7:2004)に準拠し、実験校である Setgemji、第97、第45各学校で使われている「教科書」を参考にしている。この教科書は、モ国本プロジェクトカウンターパートである Prof. Dr. Choijoo 及び Ms. Munkhtuya 両氏等によって編集されている。

したがって、ネルグイ氏が指摘(2月24日「全体会」)するように、「IT教育の指導書は、融通性に富む」特徴がある。このことは、本プロジェクトの当初からの懸案である「どんな指導書を作るか。一般的な指導書か、教科書に依存した指導書か」の議論に、改めて、導かれることとなる。前者に偏り過ぎれば、4月校了後7月を目途に全国に配布される時、「実用性が乏しい」こととなり活用されなくなる危険が伴う。また、後者に偏り過ぎれば「融通が利かない」指導書となるとの意見である(同じく2月24日「全体会」)。

しかし、「マニュアル教師」ではなく「ナレッジ教師」が必要となる時代である。

前者にしても、後者にしても、「子どもの発達」と「教科・科目の構造」を中核にして、「子ども中心の学習」つまり「学習の過程」を重視する新たな教育改革に取り組むためには、「指導書」を活用する教師の指導意欲に、いっそう期待しなければなるまい。そのためには、計画された指導内容と方法及び評価に関連する資料を「指導の基礎・基本」「発展的な指導方法改善のために」(ともに仮称)という2本の柱のもとに、指導書の随所に「コラム」のような形式でも、挿入することが望まれる。その際、「現実を踏まえ」た「段階的

な、身の丈の教育改革」を、ESD と IKE 両者の理念を、常に心して、取り組む必要がある。ちなみに、3月9日(金)午前中に開催された JCC において、特に IT 教育領域で議論された懸案事項の一つに、試行における「実験要因」の一つとして明確に意識化され指導書において明記されている「コンピュータが設置された学校」と「コンピュータが設置されていない学校」に関する協議があった。行政側は、すでにウ市のすべての学校にコンピュータが導入されているので、「設置の有無」を指導書執筆の重要な要因の一つとして考える必要はないとのことだが、果たして、そうか。

② 「モニタリングフォーム」

試行授業を通じて、モニタリングフォームの共通部分と IT 教育等領域別部分との整理が行われた。

しかし、2月19日文書「現地業務内容(2007年2月-3月13日) 今年度中(3月13日まで)にプロジェクトチームが行わなければならないこと」にあるような、その意図することはどうであれ、「簡素化する」ことを打ち出して改訂作業にあたることは、本プロジェクトが JICA 等により「特別に仕立てられた」それである限り、無意味なことであるように思える。つまり、改善作業後の2007年4月14日以降早急に取りまとめられ、7月以降モ国内に配布される計画のある限られた内容あるいは単元項目から構成される「指導書」の中に加えられる「意図的な授業及び指導方法の改善を実施する」ために用意される「授業観察シート」と、「日常的に使用されること」が期待される「授業観察シート」とは、その性格と内容とは、多いに異なってしかるべきである。後者は、「簡素化」することはあっても、前者は「簡素化」されてはならないと考えられる。

また、本プロジェクト全体の推進に活用される「モニタリングフォーム」とは、同じく、明確に区別されなければならない。

5. 今後の活動計画への提言

効果的かつ効率的なプロジェクト推進のため、現行計画に加え、以下を提言する。

- (1) 指導書及び授業観察シートの「目標」欄に、4つのコンピテンシー(K1~K4)を明示すること
- (2) 各教科・領域等での IT 活用の推進と各教科・領域間における積極的な情報交換の推進及び TVE(職業技術教育)との積極的連携の推進
- (3) プロジェクト表題にある「子どもの発達を支援する」という意味の明確化
- (4) 「実験」あるいは「試行」の目的と「実験要因」あるいは「実験仮説」の明確化及び徹底
- (5) モ国における教育及び関連する改革に関する他の援助機関との情報交換及び連携
- (6) 全国に配布された時点等あるいは適切な時点での「指導書」活用方法ワークショップの開催とモニタリングの実施及び推進
- (7) 保護者のみではなく、地域住民の協力を得る組織形成の推進
- (8) プロジェクトに関するテレビ、ラジオ等マスメディア等を介した広報活動の展開

以上